

九代 佐渡 養順 (さど ようじゅん) 略歴



生年：文政 3(1820)年 7 月 26 日

没年：明治 12 (1879) 年 10 月 3 日

幕末明治期の蘭方医。越中国高岡生まれ。高岡利屋町の町医（婦人科）・八代佐渡養順（千代九郎）の長男。母は高岡の蘭方医・長崎浩斎の妹トラ。幼名は達太郎、のち三龍、また三良と改める。諱は在邦、字は達夫。葆光斎、詩痴、山梁と号した。蘭医学書など多数の書籍を収集し、書齋を蒼龍館と名付けた。天保 9(1838)年より同 12 年まで京都の蘭方医・小石元瑞の究理堂に学ぶ。翌 13(1842)年から翌年まで、江戸の昌平黌で学び、帰郷後家業に従事。安政 3(1856)年に没した父の跡をうけ養順を襲名。弘化 3(1846)年から明治 10(1877)年にわたる長期間、越前藩医を経て幕府奥医師となった弟・坪井信良と文通を重ね、それを基に高岡で動乱の時局を論じたという。現在信良よりの書簡は約 200 通が現存している。

著書『和蘭薬性歌』（上下巻、1866 年刊）は薬名を日蘭語で対照させ、薬効を記載しており、弟・坪井信良の校閲を受けた。また漢詩にも優れ、『葆斎詩文』などの著作がある。明治元年、高岡学館が設立されると講師となり儒学を講じた（同館に「立教館」の別名を付けた）。同 9～12 年、射水郡の医務取締。ちなみに弟 2 人も医務取締に任命（九鬼秀達は砺波郡、阿波加脩造は新川郡）。

ちなみに養順の弟には信良以下、秀達（のち九鬼氏へ）、賢隆（建部氏。光昭とも）、脩造（阿波加氏）、亥六（猪六とも。号・立策）がおり、皆医学を学んだ。

坪井 信良 (つばい しんりょう) 略歴



生年：文政 6(1823)年 8 月 28 日

没年：明治 37(1904)年 11 月 9 日

幕末明治期の蘭方医。越中国高岡生まれ。利屋町の町医（婦人科）・八代佐渡養順（千代九郎）の二男。幼名は末三郎、字は良益、のちに信良、号は柊里、初白。天保 11(1840)年京都の小石元瑞（究理堂）に、のち江戸で坪井信道（日習堂）、大坂で緒方洪庵（適塾）に医学を学んだ。弘化元(1844)年 9 月坪井信道の養子となる。広瀬旭荘に漢籍を学ぶ。嘉永 6(1853)年以降、越前藩主松平慶永（春嶽）の侍医兼藩校の教師となる。安政 5(1858)年、大槻俊斎・伊東玄朴らと図り、お玉が池種痘所設立。同年、幕府の蕃書調所教授補を経て、元治元(1864)年奥医師、法眼となる。維新後、徳川慶喜に従い駿府に移転、静岡病院頭並となる。明治 7(1874)年 12 月東京府病院総取締役に就任し、10 年に退官。6 年 11 月わが国で 2 番目の医学雑誌『医事雑誌』を創刊し、8 年 12 月までに 43 号を発刊した。訳書に『謨斯篤医学韻府抄訳』10 巻、『カンスタット内科書』48 巻、『新薬百品考』全 4 巻、『呉魯斯外科書』22 巻など多数がある。

弘化 3(1846)年から明治 10(1877)年にわたる長期間、高岡の兄・九代養順（三良）へ中央政局などを詳細に記した書簡を多数送り、現在信良よりの書簡は約 200 通が現存（佐渡家には 189 通）。

子息、正五郎は日本初の人類学者。正五郎の長男・誠太郎は地質学者・鉱物学者。二男の忠二は地球物理学者。誠太郎の長男正道は物理化学者で、彼らはいずれも東京（帝国）大学教授。